

モニター終わりました

(1)

モニター生活が始まって半月。

俺は大学の講義が終わったら毎日アパートに飛んで帰るようになった。

「ただいまあ」

「あ、マスターお帰りなさい」

朝パソコンを立ち上げて電源は入れっぱなし、つまりミクを実体化したままにしている。

ミクはずっと実体化していても疲れないそうだし、大学から帰ったときに言ってもらおうこの「お帰りなさい」が嬉しいからだ。

「退屈しなかったかい？」

「いいえ。パソコンの中にいるときは退屈することもあります、実体化しているときは色々な刺激があるので」

ミクはそう言ってテレビと本棚を示した。俺がない間はこの部屋のものには自由に使っていていいと言っている。本棚って言ってもほとんどマンガなんだけど。一人でマンガを読んでもボーカロイ

ドってもの妙なもんだが、それはそれで可愛い図かもしれない。

俺はコンビニで買ってきた弁当を夕食にした。

ミクは先週おっさんが差し入れてくれたダンボール三箱分のネギを少しずつ食べている。

ミクはお腹は空かないそうだ。食べることはできるが、何か食べても身体の中に入った時点で分解してしまうので排泄という行為も必要ない。

エネルギーはどうしてるんだとか、恒常性維持はどうしてるんだとか、そういうことを考え出したらきりが無いから、おっさんがそこんとは上手に作ったんだらうで済ませている。

だからネギも要らないって言えば要らないのだけど、「そのほうがミクらしいだろう」というおっさんの好意(多分好意なのだろう)を素直に受け入れている。

おっさんは俺がミクのモニターを始めてから一週間経った日曜の夜にやってきて、俺のパソコンでログのようなものを調べた。

「ふーん。なんだ。まだミクに触ってもいいのか」

「そういう用途じゃないんでしょ」

「感心感心と言うべきか、つまらんと言うべきか」

「ご期待に沿えなくてすいませんねえ」

「あまりガチガチに考えなくてもいいんだよ。モニターなんだから」

どうもおっさんは俺がミクに何かしでかすのを待っているようだ。その手には乗るもんか。とは言っても、これはかなり辛いものがある。おんぼろアパートの俺の部屋に、設定十六歳、とびきり可愛い、しかも俺に絶対服従という性格の女の子がいるのだ。

蛇の生殺しというか、「おあずけ」を言い渡されたまま主人が行方不明になった従順な飼い犬というか。しかし俺にはこの状況に耐えうるだけの強烈な経験がある。このモニターを始めるきっかけとなったあの忌まわしい事件が。あの事件の記憶がある限り、俺がこのミクに何か「よからぬこと」をすることはないだろう。

でも、可愛いんだよなあ。

「マスター、今日はどうしますか？」

「あ、ごめん。考え事してた」

「え、考え事？ 彼女のことでですか？」

「だから前にも言っただろう。俺には彼女いな

いって」

ミクには、少し天然の要素も入れてあるらしい。ときどきとぼけたことを言うことがある。それはそれで可愛いんだよなあ。

「今日はね、昨日まで作った曲にコーラスを付けてみよう」

「はい。私頑張ります」

俺は曲作りに関しては素人だが、昔々田舎のピアノ教室に少しだけ通ったことがあるので簡単な楽譜なら読める。それに音楽は好きだから、人まね程度の曲なら作ることができるだろうと高をくくっていた。

それで、ミクが来たその日からオリジナル曲を作り始めたのだが、そう簡単にできるものではなかった。

ボーカロイドエディタの使い方はミクが教えてくれるので、その点で困ることはない。ミクの説明を聞いて、簡単な童謡などで入力の練習をして、初歩的なところは理解したつもりだ。

一通り出来るようになってからメロディーだけでも作ってみようと取り掛かったのだが、出来の悪い文部省唱歌ですかという程度のものしか作る

ことができなかった。

その後、ミクの励ましもあって、どうにか自分としては精一杯ながらちよつと面白そうな曲を作ることができた。

それからウンウンうなりながら歌詞を当てはめ、ミクに歌わせるところまでこぎつけていたのだ。

コーラスと言つても、三度とか五度とか無難な和音しか思いつかないので、あまり時間をかけないで、それなりの形にすることができた。

「マスター完成ですね」

「うん。まあ出来はよくないけど、何とかできたね。ミクのおかげだ」

「そんなあ。マスターの実力ですよ。私、この歌好きですよ」

嬉しいことを言ってくれる。

「じゃあ、明日は曲が出来た記念にミクを外に連れて行こうかな」

「え、外？ ほんとですか？」

「うん」

ミクは大喜びだった。俺達はメーカーサイトのまだ一般公開はされていないページでミク用の衣装と髪型を選んだ。

時計を見たらもう日付が変わろうとしていた。

明日の金曜は、三コマ取っている講義のうち朝一と午後一の講義が休講になったので、昼前の講義だけ出席すればいい。

とりあえず午前中にミクと一緒に大学に行き、講義が終わったらどこかに行つて遊ぼうと考えていた。

「それじゃ、パソコン落とすから。明日はさつき選んだ格好で出てきてね」

「はい。マスターお休みなさい」

これが本当の彼女だったらお休みのCHUとでもいくところだろうが、仮にそれが「軽微」で許容されたとしてもログはしっかり残るはずなので、我慢しよう。

電源を切つてしまえばその後で俺が何をしようがログに残るはずもなく、俺の自由だ。

(2)

翌日は予定通りミクを大学に連れて行つた。

秋色が濃くなつて来たキャンパスはいつもと同じように賑やかで、ミクは興味深そうにあちこち指差しては「あれは何ですか？」と俺に尋ねた。ミクの格好は、ちよつとおとなし目の女子大生と

いう雰囲気にして、髪も黒のセミロングにしていた。だから、すれ違う誰かにそれがミクであることを気付かれることはなかった。でも、特に男どもの視線が寄ってくるのはよく分かった。

キャンパスを二通り回ったあとで、図書館に入った。

「俺、これから講義を受けてくるから、戻るまで適当に本でも読んでおいて。迷子になったら困るから、あまりうろろろしないでね」

「はい。分かりました」

講義はうわの空だった。俺がいない間にナンパで声をかけられたりしてたらどうしようと気が気ではなかったのだ。

俺が図書館に戻ったのはちようどお昼時だったから、中にはもうあまり人がいなかった。

「何読んでたの？」

「これです」

ミクが見せた本のタイトルは、「中世都市の構造とその建築技法」だった。

「なんでこれにしたの？」

「書棚を眺めて最初に目に入ったからです。面白かったですよ」

ミクの感じる「面白い」って一体どういうものなのだろう。

「誰か言い寄ってこなかったか？」

「いいえ。全身から『誰も私に近寄らないでオーラ』を発してましたから」

「そんなことできるのか？」

ミクは真面目な顔で「冗談です」と言うと、ココロと笑った。

図書館を出て、さてどこへ行こう、まずは腹こしらえだなと思いつきながら歩いていたら、向こうからやってくる二人連れに気がついた。一人は、来年俺が研究室に入れてもらおうと思っている教授。もう一人はあのおっさんだった。

「やあ、君はこの学生だったのか」

「あ、はい、まあ一応」

「お、今日はミクを連れ出したか。よしよしいぞ。楽しませてやってくれ」

言われなくてもそうします。

「教授とお知り合いなんですか？」

「ああ、昔からの友達だね。学生時代にはカンニングをさせてやった仲だ」

「おいおい。僕にはそんな覚えはないぞ」

教授が慌てて否定した。

「そうか、学生の前でそれ言っちゃまずかったな」

「だから、そんなことやってないって」

どっちが本当のことを言っているのか分からなくなつた。でも二人は仲がよさそうだった。

「なぜ大学に来られたのですか？」

「こいつんとこにね。研究のアドバイスを頼まれてだよ」

「それも違う。お前がアポなしで押しかけてきただけだろうが」

「おや、アポなんて必要な間柄だったっけ」

「いらねえけどさ」  
教授はしようがないなあという感じの笑顔を見せた。

科目の講義のときとは違う教授の顔を初めて見た。

「どこかで私達はこれから学食でランチだけど、君も来ないか？ おごるよ」

教授と一緒に食事は緊張するが「おごるよ」の一言は大きかった。ミクが来てからバイトを減らしたので、学食とはいえ一食分浮くのはありがたい。俺はミクを連れて二人についていくことにし

た。

学食は混雑のピークを過ぎていた。俺達はフロアの隅の隅の誰もない一角に座った。俺はAランチ、ミクはネギチャーハンにした。

「ミクのことを連れ出すのは構わないけれど、まだ一般には公開してないから、あまり人には喋らないでいてくれよ。信用できる相手に少し話すくらいならいいけどね」

おっさんが俺にそう注意したら、教授がその話に興味を持ったようだ。

「何だよ一般公開って」

「ほら、この前話した実体化のことだよ。目の前にいるのがそうだ」

「え、これがそうか」

教授はテーブルに箸を置いて立ち上がり、ミクの後ろに回りこんでしげしげと観察を始めた。そのうちに腕に触ったり、頭に触ったりするようになった。ちよつと教授、俺まだ指一本触れてもいないんですけど。それにしても、あつち系の意図を持たないで触るのは問題ないのか。俺には難しいけど。

「ふーん。よく出来てるなあ。これじゃあ人間と

見分けがつかない」

「だつろう」

教授は俺が非難めいた目で見ていることに気付いたようだった。

「君がこの子のマスターってことか。いや、ごめんごめん。勝手に触って悪かった」

「彼はね、まだこのミクに直には触ってないんだよ。前に痛い経験をしてるから」

「ああ、そうか。こいつが前に言ってた被検体って君のことだったのか」

おっさん、一体何を話したんだ。

「悪いのに捕まったねえ。でも色々面白い経験ができると思うよ。こいつは真正の天才だからね」

「褒めてんのかけなしてんのか分からん言い方だな。もつと褒めろ」

「いや、これ以上言うて凶に乗るから」

おっさんと教授は楽しそうに話を始めた。俺とミクはもう食べ終わったので、おごってもらったお札を言って立ち上がった。

(3)

夕食を出て、さてどこへ行くこう、ミクとなら買い物や映画って感じじゃないし、遊園地にも連

れて行くかなどと考えながら歩いていたら、建物の角であの子にばったり会った。

「先輩こんにちは。お久しぶりですね。最近サークルに顔を出さないじゃないですか」

「あ、うん。ちよつと……。忙しくてね」

俺はあの子の前になるとあがってしまったてうまく話しができなくなる。

「みんなどうしたんだろうって言ってますよ。あの、それでこちらは？ あ、もしかして」

あの子はミクを見てちよつと驚いたような反応を見せた。これは嫌な誤解をしてそうだ。でもどう紹介しよう。

「あ、これはね。うーんと。あ、俺の妹。今日高校の創立記念日で休みっていうから大学を案内してたんだ」

「妹さん？ ふーん。可愛いですね。あれ、でもどっかで見たことがあるような。どこだったっけ……。そうだ、ミクにそっくりじゃないですか。

ポーカロイドの。この顔でコスプレしたらすごい受けますよ」

「初めまして。初音ミクです。いつもマスターがお世話になってます」

モニター終わりました

おい。自分からばらしちゃダメだろうが。

「あはは。面白い。妹さんノリがいいですね」

「いいえ、私は妹ではありません。ボーカロイドの初音ミクです」

あの子が真顔になった。冗談のつもりだったろうに、こう返されてはフォロワーのしようがない。

「あの、先輩？ どういうことですか？」

「マスター、この人は信用できません。私のことをお話しても大丈夫です」

「大丈夫って」

「あそこのベンチでお話ししましょう」

ミクはそう言うと、先に一人でスタスタ歩き出した。

「今、時間ある？」

「え、ええ。午後の講義は休講になっちゃいましたから」

「じゃ、ちよつと」

俺はあの子を促してミクを追った。ベンチであの子を真ん中にして俺とミクで挟む形で座った。

俺がミクの顔を見たら、ミクは大きく頷き、話をするよう合図した。ミクが何を考えているのか分からないが、こうなってしまうたらあの子の話

すしかないだろう。

俺はあのおっさんに会ってから今日までのことをかいつまんで説明した。ネギ畑での出来事は一部省略した。

「それじゃ、この子は本物の初音ミクなんですか」

「本物っていう意味にもよるけど、ここにいるミクは俺のパソコンに入っているボーカロイドのミクが実体化したものであることは間違いないよ」

「信じられない」

「だろうね。俺もまだときどき半信半疑になることがある」

あの子は髪型や髪の色、着ている服が違うのはなぜかと聞いた。俺はメーカーのサイトから選べることを説明した。

「歌は作ってるんですか？」

「ああ、昨日一つできたよ。下手だけどね」

「聞いてみたい」

「今開いているのはコーラスの方のファイルだからここでは無理だ」

「じゃあ、今から先輩の部屋に行くってのは駄目ですか？ 公式の格好したミクちゃんも見たいんですけど」

ええええええええええええええええ。何て展開だ。

ミクを見たらうんうんと頷いている。俺は努めて平静を装い「ああ、いいよ」と答えた。

俺はアパートのドアの前で二人を待たせたまま、大急ぎで万年床をたたみ、部屋の中をあらかた片付けた。掃除をしている時間がないのが残念だが、もうこれ以上待たせることはできないだろう。

あの子は、一旦パソコンに戻ってから公式コスチームで現れたミクを見て大喜びだった。

「私、ボーカロイド大好きなんです。まさか実物に会えるなんて。ミクちゃん、何か歌ってもらっていい？」

俺はまずこの前おっさんから貰った歌のデータを歌わせてみた。続いて、昨日完成したオリジナル曲のメインパートを歌わせた。

「これって、先輩が作った歌なんですか。面白いじゃないですか」

「そう言ってもらえると。でも、だって、歌を作るなんてこれまでやったことないから、全然自信ないんだ」

「そんなことないです。これに伴奏を付けたらネットに投稿だってできますよ」

「伴奏までは無理だなあ。俺、楽器弾けないし、DTMもやったことないんだ」

「それじゃあ、私がピアノ弾きます。何だったら学科の友達に手伝ってもらってもいいです」

あの子は教育学部音楽科の二年生だ。そのあの子にピアノで伴奏してもらえるなら、作品として完成する。

でも学科の友達の話は断った。ミクが実体化することはまだあまり広めるわけにはいかない。

同時にあの子にも他では喋らないように頼んだ。俺はミクの歌をファイル化したものをあの子のメールアドレスに送信した。あの子はそれからしばらくボーカロイドエディタをいじってミクに歌わせて遊んだ。

「じゃ、伴奏できたらまた来ますね」  
夕方になって、あの子はそう言って帰っていった。

「ミク。学校であの子のことを信用できるって言ったのはなぜだ？ そんなこと判るのか？」

「いいえ、マスター。そんなことは判りません」  
「じゃあ、なぜ」

「だって、あの人なんでしょう？ マスターが好



きなのは」

「え」

「マスターの様子見てたらず判りました。ここは一肌脱ぐべきかなって。ボーカロイドを知ってるみたいだったから、私がそうだって言えば話のきっかけになるでしょう。ここに来るとまでは思いませんでしたけど。余計なことだったでしょうか」

俺は思わずミクを抱きしめていた。セクハラ基準なんて知ったことか。

「GJ! ミク。GJだ」

ミクは消えなかった。嬉しそうにニコニコしていた。

(4)

日曜にやってきたおっさんは、ログを眺めてご満悦だった。

「面白いことになってきたねえ。愉快愉快」

「俺、あなたを楽しませるために生きてるんじゃないんですけど」

「いやいや。人生は持ちつ持たれつ」

訳わからない。

「そのログでどこまでわかるんですか？」

「ミクが見聞きしたこと、感じたことは大体わかるよ。ログデータを読み解けるのは私だけけどね。この前ここに君の意中の女性が来たことも分かる。そのあと君がミクに何をしたかもね。君は私の予想した通り面白い反応をするねえ」

俺はモニターと言う名の実験動物かい。

「ちよつと聞いていいですか？」

「何だい？」

俺は疑問に思っていたことをおっさんにぶつけた。それは、「ボーカロイドは成長するのか」「死ぬことはあるのか」の二点だった。

おっさんの答えは次の通り。

・ボーカロイドの実体化身体は成長しない。設定年齢も変わらない。但し、経験によって内面の成長はある

・死ぬことはない。但し、ソフトをアンインストールしたら、その自我が消滅するから実質的に死と同じだ。

・記憶は都度メーカーのサーバーにバックアップしているから、万一パソコンがクラッシュしても復旧できる。パソコンを更新して移すこともできる。コピーは不可。

「じゃあ、例えばですよ。何十年も同じボーカロイドを使い続けることも可能なんですね」

「いや、それはできない」

「どうしてですか」

「動作期限を設定する」

「おっさんは動作期限を最初のインストールから五年、メーカーの生産打ち切りから十年にすると言った。それを過ぎたら実体化できなくなり、パソコンの中の自我も記憶ファイルを残して消滅する。」

「なぜそんな設定を」

「人生に別れはつきものさ」

「期限が来たらボーカロイドを殺すってことですよね」

「それは違う」

「ハードの手当てさえできれば、原理的にはボーカロイドの寿命は永遠だ。しかしおっさんはボーカロイドを生物、ましてや天賦人権を持った人として扱う気はないと言う。」

「永遠の寿命を持つ生物など存在してはならない。逆説的になるが、動作期限を設定することで私はボーカロイドに人間と同等の尊厳を与えたと思っ

ている」

「おっさんの言いたいことが少し分かったような気がした。五年後か。その頃俺は何をしているのだろう。」

翌日、大学のトイレで教授に会った。時間があんなら研究室にお茶でも飲みに来ないかと誘われたのでついていった。

「どうだい、モニター生活は」

「まあ楽しくやってます」

「そうか。市販されたら僕も買おうかな」

「教授は実体化の原理をご存知なんですか？」

「ああ、あらまはあいつから聞いてるからね」  
教授は、あのおっさんは天才だけど、徹底的に組織に向かない人間だと言った。だから大学や企業に所属しないで一人で好きなことをやっているのだ。分かるような気がする。

収入は企業からの委託研究や特許などで得ているそうだ。

「実体化については特許出願しないって言ったよ。特許するのは発明に対する独占的な権利を持つけど、それは発明した技術を公開することの代償なんだ。特許期間が過ぎたら、誰でも自由に

使えるようになる。でも今の人間にあの技術を公開したら危険だつて」

「それは天才の驕りつてやつじゃないんですか？」

「いや。あいつはまず遊びの要素が強いボーカロイドで実体化技術を世に出して、人類全体で議論が巻き起こそうとしているんだ。それで実体化した存在をどう受け入れるかの世界的なコンセンサスが得られたら技術を公開するつもりらしい」

あのおっさんはそこまで考えていたのか。

「この前は何をしに大学に来ていたのですか？」

「それがね。あいつの研究所に学生を世話してくれないかって」

「社員として採用したいってことですか」

「うん。うちの学生は常識人が多いから、お前みたいなのぶつ飛んだやつのもとに行きたいってのはないだろうとは言ったけどね」

「それに組織には向かない人なんでしょう。それが部下を持ちたいってのは」

「ああ、研究所の切り盛りはあいつの奥さんがやってるんだよ。人を欲しがっているのはあいつのようだけだ」

「あのおっさん、いや、gatsutakaさんに奥さんがいたんですか」

「あれ、知らなかったの？ これがまた出来た人でねえ。研究所の経営は奥さんのおかげで成り立ってるようなもんだ。むしろすごい利益を出している。あいつ一人が資産みたいなものだから、経費なんて無いのも同じだからね。息子もいるよ。あの子はまだ小さいけど、あいつの血を引いててやっぱり天才だ」

驚いた。そんな出来た人が奥さんとしていたとは。しかも何と、あの研究所の隣の家が自宅でそこにいるのだそう。でも、おっさんの研究所は言ってみれば従業員一人の零細企業だ。そんなところに好きんで就職しようなんて学生はいないだろう。

(5)

週末にあの子がまたアパートに来てくれた。伴奏ができたよ、それを録音したファイルを持ってきたのだ。大学のピアノを借りて録音したそう。俺のパソコンでその伴奏とミクの歌を重ねてネットに投稿した。

丁度投稿が終わったときにおっさんがやってき

た。

「おお。とうとう君にも彼女が出来たか」

「違います。ボカロ仲間です」

「何だつまらん」

「あれ、先輩って彼女いないんですか」

「君はどこに目を付けてるんだ。こんなのに簡単に彼女が出来るわけ無いだろうが」

「こんなのとはあんまりだ。」

あの子はおっさんと馬が合うらしく、すぐに打ち解けてしまった。このおっさんとすぐに仲良くなるなんて、俺、あの子のことを見誤っていたのだろうか。

「実体化ソフトはいつ頃市販されるんですか？」

「今、何人かにモニターやってもらってて、それがもうすぐ終わるから、その三ヶ月後くらいかな」

「待ち遠しいです。私も欲しい」

「どのキャラがいいのかね」

「私はカイト。リンレンも」

それからもあの子はちよくちよく遊びに来るようになった。自分で作った歌をミクに歌わせるのが目的だ。そのうちに、夜遅くなったときなど泊まっていくようになった。

でも誤解しないでもらいたい。あの子が泊まるときは、ミクは一晩中実体化したままだ。三人で雑魚寝しているようなものだ。俺はひたすら耐えるしかない。

とは言え、ミクは俺達が寝たあとでも一人で起きていて机で本を読んでいる。狭いから三人並んで寝転ぶのが厳しいということもあるが、そもそも実体化したボーカロイドは寝る必要がないのだ。

本は俺が大学の図書館からミクが好みそうなのを見繕って借りてきてやっている。

モニターを始めて一月半後、おっさんがやってきてモニターの終了を告げた。

「細かいログを取る設定は解除した。それとこれ、約束していた謝礼だ」

「ありがとうございます」

中には結構な額が入っていた。

その日も遊びに来ていたあの子が「研究所を見せてもらえませんか」と言い出した。

「だって、研究所では他のキャラも実体化できるんでしょ」

「ああできるよ。そいじゃ先に行ってみんなを実体化しとくから、あとから彼と来なさい」

おっさんが帰ってからしばらく待って、あの子と二人で研究所を訪ねた。ミクはパソコンに戻しておいた。研究所にもミクがいるし、他にもボカロが沢山実体化しているだろうからだ。

研究所に向かう道すがら、あの子のことを色々聞き出すことができた。考えてみれば俺はあの子のことをあまりよく知らないのだ。

あの子は、俺のアパートから見て大学の向こう側にあるアパートに住んでいる。ところが、そのアパートが立て替えることになり、近々出なければならなくなった。今引越し先を探しているという。

「俺のアパート空き部屋があるけど」

俺はちよつとときめきながらそう言ったが、「今度の部屋には実家からピアノを持って来たいからピアノを弾いても周りに迷惑にならないようなところがいいんです」とあっさり振られた。あのおんぼろアパートじゃ無理だ。

「引越しが決まったら俺も手伝いに行こうか」

「ほんとですか？ 助かります。ピアノは専門の業者さんに頼むんですけど、他の荷物は実家の父が軽トラックを借りてきてそれで運ぶって言うん

です。でも父は腰を痛めているし。他に男手がないしどうしようかと思ってたんです」

他に男手が無いという情報はポイントが高い。ということ、あの子はフリーってことだ。

俺はウキウキしながら、研究所のチャイムを鳴らした。

「はい」

ドアが開くと、リンとレンがいた。その向こうには他のボカロがずらりと並んでいる。

「きゃー！ー！！」

あの子は悲鳴に近い声を上げた。

それから、全員での合唱など豪華なもてなしを受けた。

でもミクがいなかった。もしかしたら、俺がミクを連れてくると思っておっさんが研究所のミクだけは実体化しなかったのかもしれない。こんなことなら、俺のミクを連れてきてやればよかったな。

あの子の興奮がおさまった頃、おっさんの奥さんが全員分のお茶とケーキを持ってやってきた。

その後ろに小学校低学年くらいの男の子もくっついてる。

奥さんは想像以上の美人だった。しかもそつがない雰囲気、なんでまたこんな人がこのおっさんと、と思った。

「奥さんはどうしてご主人と結婚されたんですか？」

お茶を飲みながら、あの子が直球の質問を投げた。それは、普通、聞けないぞ。

「ああ、この人はね、私がいけないと何もできないのよ。折角の天才を無駄にしたら世界の損失でしょう。だからね」

うーん。これまたすごい回答だ。

「ところで、お二人つきあつてらっしゃるの？」

「いいえまだ」「はい」

俺とあの子が同時に答えた。

はいはいはい？？

「あれ、先輩、まだどうということですか？ 私

もうとつくにそのつもりだったんですけど」

「はいはいはい？？？」

「ウププ。君らしいねえ」

おっさんには言われたくない。

(6)

それから、あの子が新しい部屋を探していると

いう話になった。

「あら、じゃあ、うちに来ない？ 部屋は空いているし、主人は殆どこつちで寝ているから。私が使っていたピアノもあるのよ。ちゃんと調律しているし」

「でも、私結構ピアノに時間かけますよ。お子さんもうらっしゃるし、うるさいと思うんですけど」

「大丈夫よ。ピアノのある部屋は主人が防音工事したの。全然音が漏れないから」

それは願ったり叶ったりだということで、即決した。しかも、朝晩の賄い付き。部屋代はその食費にも足りないくらいの額だった。

「今まで一人暮らしだったら、ちよつと窮屈に思うかもしれないけれどね」

「はいえ。そんなことはありません。よろしくお願ひします」

「どう。君はこつちに越してこないか？」

おっさんがそう言った。こつちとは研究所のことらしい。

「その上で私の仕事を手伝ってくれたら部屋代免除にしよう。バイト代も出す」

「あの、俺、天才のお手伝いなんてできませんよ」

「それは期待していない。雑用も沢山あるんだよ」  
俺は提示された条件、状況を即座に天秤にかけた。

なにより、あの子とお隣さん、しかも食事は一緒というのは大きかった。

「引越します」

「ほう。よし。あ、でもね、君たちが喧嘩したり、別れたりしても知らないからね」

うぐ。まあ今からそんなこと心配しても始まらないだろう。

夕食までごちそうになってから研究所を辞した。あの子は今日も俺のアパートに泊まると言った。あれ、ちょっと待てよ。今日はミクをパソコンに戻してやるんだけど。

翌日から引越しの準備を始めた。

まずは、あの子の部屋の荷物をまとめるところからだ。大学の帰りにあの子のアパートに行つて、少しづつ荷造りをした。でもあまり遅くならないうちに帰ることにした。ミクを昨日の昼から実体化させていないから寂しがるといけないと思つたからだ。

ミクは引越しの話と、俺があの子と付き合いた

したという話を聞いて喜んでくれた。

「私、あの人好きです。私のこと可愛がつてくれたし。それに、マスターとあの人が付き合いたしたきつかけが私だつて思うと、とても嬉しいです」  
「本当にミクのおかげだ。ありがとう」

「これで私も安心して戻ることができます」

「ん？ 戻るつて、どこへ」

「電子の海にです」

俺は全力でおっさんの研究所へ走つた。そんな馬鹿なことつてあるか。ミクがもうすぐ消えてしまうなんて。

俺はチャイムも鳴らさずに鍵のかかつていない玄関に飛び込んだ。息を切らしてその場で咳き込んだ。

すぐに物音を聞きつけておっさんが出てきた。

おっさんは俺の用件が分かっていたようだった。

「やあ、来たね」

「来たねじゃありません。どういふことですか。ミクが消えるなんて」

「まあ、上がりなさい」

俺はおっさんに説明を求めた。おっさんは丁寧に説明してくれた。

俺はモニターの第一号だったそう。ボカロを持つていなかったただ一人のモニターだ。

その後、既存のボカロユーザーに個別にコンタクトして承諾してくれた数人をモニターとして追加した。

それは終了時点でボカロが消滅するという条件も込みでのモニターだった。つまり、製品版で五年とした動作期限が来たときのユーザーの反応を推定するためのテストも兼ねることになったというのだ。その人たちのモニター期間は一ヶ月と設定された。

その条件は、メーカーとの話し合いの末、俺がモニターを始めてまもなく決定された。動作期限でボカロが消滅するという設定は、おっさんが強硬に主張して採用された。それは実体化ボカロに対するおっさんのポリシーだった。

モニターのためのメーカーサーバーは、俺のミックも、他のモニターさんのボカロも同じものを使っている。だから、消滅の設定は俺のミックにも適用されるのだ。

おっさんは設定織り込みが決定したあとで、まず俺のミックにデータの形でそれを伝えた。ミックは

それを受け入れたが、俺には言わないでいくれと懇願したのだそう。

「最初からその条件を知っているモニターならともかく、何も知らないで始めた君が、途中でそれを言われても困惑するだけだろうと。ミックはすぐに君が好きになったんだ。君もミックを大事にしてくれた。だから、ミックは悲しむ君を見たくない、一緒に過ごせる時間を楽しくしたいと考えたんだ」

その話を聞いて、俺は涙が流れて止まらなかった。

「君には本当に申し訳ないと思っている。モニターのボカロは、製品版と同じように期限を五年にするつもりだった。しかし、メーカーはモニターテストを行なわない限り、その設定を織り込むことはできないと言いつ出した。確かに、メーカーとしては必要な措置だろう。私はこの設定は絶対に必要だと思っている。だから、モニターテストに組み込むことに同意した」

「俺のミックはいつ消えるんですか」

「明日の夜。日付が変わるときに」

もう時間はいくらかも残されていない。



研究所を出るときに、見送りに来たおっさんが言った。

「君にはあと二つ話してないことがある。それはミクに聞いてくれ」

俺は目を腫らしたままアパートに帰った。

「マスター。お帰りなさい」

ミクがそう言って笑顔で迎えてくれた。そして俺が話を切り出す前にこう言った。

「マスター。お願いがあります。明日、私をどこかに連れて行って下さい。楽しい思い出を作りたいんです」

「うん、いいよ。この前行くつもりだった遊園地に行こう。お金はモニターの謝礼で沢山貰ってる。

目一杯楽しもう」

「ありがとうございます。それじゃ、明日寝過ぎしたりしたら嫌だから、パソコンの電源を切って、マスターももう寝てください」

(7)

翌日はいい天気だった。

俺は大学をさぼって、ミクと二人で遊園地に出かけた。

ミクは公式の格好で実体化させていた。周りか

ら注目的だったが、そんなことはどうでもよかった。

丸一日、遊んだ。今夜ミクが消滅することは忘れて楽しんだ。

日が暮れてから乗った観覧車から見た夜景は、心に残る美しさだった。

観覧車を降りたところで遊園地のスタッフに撮って貰った写真には、俺とミクの最高の笑顔が写っていた。

遅くなってからアパートに戻ったら、俺の部屋の前であの子が待っていた。

「gatutakaさんから電話を貰ったの。私もミクちゃんに会いたくて」

「ありがとうございます。とっても嬉しい」

あの子は色々なネギ料理を作ってきてくれていた。

三人でそれを食べた。ミクはおいしいおいしいと言って沢山食べた。

それからしばらく、三人で歌を歌って過ごした。刻限が近づいた。

「マスター。私はマスターに黙っていたことが他にもあります。私は新しいミクではなく、あのネ

ギ烟でマスターに会ったミックなんです。研究所に  
いるとき、マスターのところでもモニターが始まる  
というお話を聞いて、私からその対象にしてもら  
うことをお願いしたのです」

「どうしてまた、俺の所に」

「はい。私はあの夜の記憶がありません。本能部  
分だけで外に出ていましたから。でもマスターの  
顔を平手打ちしたその手に、私が初めて触れた人  
間の暖かさを感じていたのです。多分それは前の  
晩の出来事を本能部分が覚えていて、身体にもそ  
れが伝わっていたのだと思います。ちよっと変な  
体験ですけどね」

ミックはそう言って笑った、

あの子が「どういうこと？」という顔で俺を見  
たので、俺は「後で説明するから」と囁いた。

「私はマスターにとっても興味がありました。この  
人はどういう人なんだろうって。だからここに来  
たのです。最初にどっちがマスターですかって聞  
いたのは演技です」

ああ、そうだったな。ミックはこの部屋で俺とおっ  
さんを見てそう聞いたんだった。

「私はマスターの所に来ることができてよかった

です。マスターは私を本当に大事にして下さいま  
した。このことを黙っておくようにと言ったのは  
gatsutaka さんです。私がネギ烟のミックだって  
知ったら、マスターの反応が変わるだろうからつ  
て。私はあの研究所で生まれた一号体です。これ  
から市販される初音ミックには全て私の無意識がコ  
ピーされます。だからどのミックもマスターの温も  
りをその奥の方に持っているんですよ」

それからミックはあの子を向いて、「お願いがあり  
ます。しばらくの間、目をつぶっていてもらえま  
せんか」と言った。

あの子は何も言わずに頷き、そのまま目を閉じた。

「もう一つ、黙っていたことがあります」

「何？」

「私にはセクハラ基準は設定されていませんでし  
た。gatsutaka さんはマスターへのイタズラのつ  
もりだったようですけど、私には最高のプレゼン  
トになりました。私が逆セクハラしても実体化解  
消しないんですよ」

ミックはそう言うのと俺の唇にキスをした。

「ありがとうございます。もう目を開けて下さ  
い」



イラスト 厨やん

「ミクがあの子にそう言った。  
「時間です。マスター、笑って見送って下さい。  
私はマスターと一緒にいられて幸せでした。お二人、ずっと仲良くして下さい。さようなら」

俺は精一杯の笑顔を作ってミクを見た。  
ミクは俺の手を取るとそれを自分の頬に当て、その温もりを愛おしむように涙を零し、笑顔のまま泡のように消えていった。  
それから俺は、あの子の膝を借りて、朝起きてから今までずっと我慢していた涙を流し続けた。

(8)

彼女の引越しの翌月、俺も研究所に引越した。  
おっさんは人使いが荒いけれど、なんとかか大学と仕事を両立させることができた。  
しばらくして彼女にネギ畑での出来事を話したら、いきなり平手打ちされた。

「先輩ってそんな人だったんですか」

それが俺と彼女の最初の喧嘩だ。でも、「まあ、それが今の私達に関係につながったと考えたら、許すしかないですね」と、ごく短時間で終わってしまった。

さらに翌月、メーカーから俺の所にライセンス番号が届いた。

どれか一つ、好きなキャラのソフトを実体化オプション付きでダウンロードできるものだ。

俺のパソコンには自我がなくなったミクのソフトがまだ残っている。

俺はしばらくは新しいボカロを使う気になれなかったのだ、そのライセンスを彼女に譲った。

彼女は、以前カイトカリンレンと言っていたのに、ミクを選んでくれた。

「そのうちに増やしたいけどね。やっぱり最初はミクちゃんがいいや」

その翌年度にあの教授の研究室で卒論を書き上げて大学を卒業した俺は、晴れておっさんの研究所の社員になった。

一流企業に就職した同級生の初任給よりはるかに高いサラリーを貰っている。その分、仕事もハ

ードだ。実体化存在について話し合う世界各地のセミナーやシンポジウムに、おっさんの代理で出席することもある。

おっさんは更に精力的に新しい色々な研究に取り組んでいる。研究所の名前は、その時々のおっさんの興味がある対象によって頻繁に変わる。だから紙の表札だったのだ。

おっさんの息子は奥さんの性格を受け継いでいてとてもかわいい。俺と彼女にもなついでくれた。いずれはこの子が研究所の中心になるのだろう。

おっさんの奥さんは、空き家になっていた研究所の反対隣の家を借り上げて、社宅として俺と彼女に提供してくれた。

彼女が卒業するまで籍は入れないが、その社宅で実質的な新婚生活を送っている。

沢山のボカロがうろうろしているから、二人だけの甘い生活って訳にはいかないだけだね。

新居の居間には、遊園地で撮った写真とともに、パソコンに残っていたミクの記憶をROMに焼いて飾っている。(了)